

丸屋商社之記

凡ソ事ヲ爲スニハ先ヅ自カラ其身分ノ地位ヲ考ヘザル可ラズ今我輩ノ地位ヲ考フルニ官ニ在テ政ヲ爲スノ責アルニ非ズ亦奴隸ト爲テ他人ニ仕ルノ務アルニ非ズ不羈自由我欲スル所ヲ爲ス可キ日本人ナリ既ニ日本人ノ名アレバ亦其日本人タル身分ヲ考ヘ日本全國ノ繁盛ヲ謀リ同國人ノ幸福ヲ助ケ成サメル可ラズ昔鎖國ノ世ニ在テハ人皆自國ノ有様ニ満足シテ更ニ歩ヲ進ルノ志アル者ナク却テ自負驕慢ノ弊ニ陥リ或ハ此國ヲ武ノ國ト稱シ或ハ義ノ國ト唱ヘ或ハ萬國至尊ノ神州ト云フ者アリ或ハ百需全備ノ富國ト云フ者アリテ自國ヲ尊崇スルコト其實ニ過キ徒ニ虛名ヲ設テ獨リ自カラ悦ビシコトナレトモ今日外交ノ盛ナルニ當テハ其虛名ヲ棄テ、實ヲ求メザル可ラズ竊ニ此國勢ヲ察スルニ近來我海陸ノ軍制一面目ヲ改メタリト雖モ未ダ彼ノ國ノ盛ナルニ及バザルハ明ニ人ノ知ル所ナレバ獨リ我國ノミヲ以テ武國ト稱ス可ラズ世界萬國義理ヲ棄テ、國ヲ建ルモノアルヲ聞ズ西洋諸國既ニ建國ノ名實アレバ悉皆不義ノ國ニ非ザルコト明白ナリ然バ則チ獨リ我國ノミヲ以テ義國ト云フノ理ナシ西洋諸國各獨立ノ一政府ニテ比肩併立互ニ其國威ヲ持張スルモノナレバ獨リ我國ノミヲ以テ至尊ノ神州ト唱フ可

ラズ天然ノ物人工ノ品萬國各其類ヲ同フセザレバ獨リ我國ノミヲ以テ全備ノ富國ト云フ可ラザルナリ虛心平氣以テ世界ノ景況ヲ問ヒ其文明ノ前後ヲ察スレバ我日本國ハ數千百年鎖國ノ睡眠中ニ西洋ノ諸國ヲシテ恰モ先鞭ヲ著ケシメタルモノニテ我國コソ却テ彼國ノ有様ニ及バザル可シ是即チ我輩ノ常ニ患ル所ニテ其所患ノ原因ハ先ヅ人數百年ノ安眠中ニ醸シ成シタル遺傳ノ國毒ナリ今コノ毒ヲ一掃シテ彼ノ文明ノ域ニ入り共ニ進歩ヲ爭ハントスルニハ其事固ヨリ多ク其業固ヨリ難シ文學研カザル可ラズ武備修メザル可ラズ百工技藝一モ等閑ニス可キモノナシト雖モ就中至重至大コレヲ等閑ニシテ禍ヲ致スノ速ナルモノハ商賣ノ一事ナリ抑モ外國人ノ我國ニ來ルハ唯和親ノタメニ非ズ其實ハ貿易ヲ行ハンガタメナリ現今外人ノ我國人ニ接スル趣ヲ見ルニ文學ヲ傳ル者アリ技術工藝ヲ教ル者アリ法ヲ講スル者アリ武ヲ演スル者アリト雖モ是等ハ皆外國交際ノ技末ニテ彼ノ大眼目ハ唯貿易ニ由テ利益ヲ求ルノ一事ニ在ルコト固ヨリ論ヲ俟タズ然ルニ今コノ貿易商賣ノ權ヲ外人ニ占ラレ坐シテコレヲ傍觀スルハ日本人タル我輩ノ義務ニ背クト云フ可シ一度ヒ貿易ノ權ヲ失ヒ彼ニ致サレ彼ニ依頼シ彼ノ元金ヲ借り彼ノ社中ニ役セラレ或ハ我社中ニ彼ノ國人ヲ招キコレヲ尊ビコレヲ仰ギ其指令ノ下ニ奔走スル等ノ勢ニ陥ルコトアラバ國ノ災害コレヨリ大ナルハナシ斯ノ如キハ則チ國其國ニ非ズト云フモ可ナリ

國其國ニ非ザレバ文學技術モ用ヲ爲スニ處ナカル可シ是即チ我輩ノ所見ニテ商賣ヲ至重至大ノ急務ト爲シ彼ノ文學技藝ハ先ヅ他ノ學者ニ任ジ政治ノ事務ハ在官ノ人物ニ譲リテ我身ハ專ラ商賣ニ從事シ日本國ノ商法ヲシテ獨立ノ地位ヲ得セシメ同國ノ人ヲシテ其幸福ヲ失ハシメズ以テ我輩ノ身分ニ耻ルコナカラント企望スル所以ナリ

何等ノ職業ヲ問ハズ執行煉熟ナクシテ成シ得ベキモノニアラズ然ルニ今吾輩社ヲ結ビテ商賣ヲ營マントスルニ當リ嘗テ學ビシコモナク又馴レタル事モナシ之ヲ學バンニモ世間商賣學校ノ設アルヲ聞カズ又帳合ノ仕方ヲ教ル人サヘモナキヲ如何セン依テ謂ラク吾社中ノ人僅ニ英書ノ表題ヲ解スルモノアリ又藥品ノ名稱ヲ知ルモノアレバ此類ノ品ヲ以テ業トナシ吾會社ヲ以テ商賣學校ト見做シ吾徒實際執行ノ道場トシテ歲月務メテ止マズンバ漸ヲ追テ商賣ノ道ヲモ學ビ得ルノ時アラント是即商賣ニ附テハ無學文盲ナル吾輩ノ斷然意ヲ決シテ事ニコハニ從フ所以ニシテ敢テ一時ノ盛業ヲ企望スルニハ非ザルナリ

凡ソ人ノ生業ハ世間ノ不足不自由ヲ達シ吾不足不自由ヲ満足セントスルノ外ナラズ他ノ不自由ヲ達スルノ大ナルモノハ吾幸福ヲ得ルモ亦從テ大ナリサレバイカナル生業ヲナサバ吾徒ノ力ヲ能ク他ノ便用ヲナシ得ベキヤヲ議セザルベカラズ願フニ近來世間開化ノ

端ヲ啓キ諸藝術モ亦進歩ヲハジメ人間幸福ヲ増スノ時ニ向ヘリサレモ未ダ何事モ備ワラザルモノ多ク恃^ツニ人世ノ急務タル教育ノ職濟生ノ業ノ如キモ或ハ洋籍ニ乏シク或ハ藥品醫用器械ニ乏シク不自由少ナカラズト云ベシ故ニ吾社先此品類ヲ賣買スルヲ以テ專業トナサントス

人間ノ業務ハ盛衰常ナシト雖モ其盛衰ヲナスノ原ハ事物ニ處スルコト正理ニ依ルト之ニ悖ルトノ際ニアルベシ故ニ一人事ヲ獨裁スルモ或ハ誤テ正當ヲ失スルモ他ヨリ之ヲ批判裁正シ難シ是レ危害ノ由テ生ズル所ナリ同志社ヲ結ビ相互ニ輔ケ相互ニ正シ以テ正理ニ悖ラザルヲ求メバ自ラ轉覆ノ患ヲ防グニ足ルベシ今同志數輩ト諮リ或ハ元金ヲ出シ或ハ其身ヲ容レテ一商店ヲ開キ丸屋商社ト名ク其元金ヲ出ス人ヲ元金社中ト名ケ其身ヲ容ルハ人ヲ勸社中ト名ク

勸社中ノ心得

吾勸社中ハ商賣ニ煉熟スル人モナク用ユル所ノ元金モ甚ダ多キニ非ザレバ世上有力ノ人ト例ヲ同フセバ轉覆從テ來ルコト必セリ故ニ勉メテ儉節ヲ守リ正實ニ業ヲ營ミ信以テ天ノ輔ヲ招キ儉以テ經濟ヲ護リ偏ニ會社ノ長久堅實ヲ企望シ各人互ニ相扶ケテ後來ノ幸福ヲ希フベシ

合衆國貨幣ノ銘ニ曰ク合スレバ即チ立チ散レハ即チ幣^{ワル}ルト^{イテツ}イテツ

トウキ スタン^ド セバ^レ 又西洋ノ古語ニ曰ク徐々ニ急グ可シト
トキ^ト ウキ^ト フオ^ル スロ^ー リ^ー ハスト 何レモ商業ニ就テノ戒メニハ非レ^レ 吾働社中ノ人

此語ヲ以テ意トセバ轉覆ノ懼レナキニ近カラシ又或ル老人ノ咄シ
ニ世間ノ商家一廻ノ商ヒニ萬金ヲ得ルモノハ屢々アレ^レ 十年ニシ
テ數萬金ヲ殘ス人ハ稀ナリト商人ノ目ヲツクベキ所ナルベシ

損失アル時ノ心得

大概商業ニ危害ヲ帶ザルモノナシ故ニ永年ノ間ニハ災害モ過失モ
アルモノト思フベク常ニ其心得ナクテハナラヌモノナリ若シ不幸
ニシテ災害ニ逢フモ又商賣上ニ損失アリ^レ 急ニ之ヲ復セント思フ
コ勿レ又徒ラニ之ヲ悔ユベカラズ其損ヲナシタル所以ノ原由ヲ顧
ミ以テ後來ノ戒メトセバ却テ安全ノ基^ニ ナリ何時トナク回復ノ出
來ルモノナリ左スレバ數年ニ一回宛ノ損アリ^レ 轉覆ニハ至ラザル
ナリ若シ大ニ其損ヲ悔ヒ偏ニ之ヲ復セント謀ル^ル ハ多クハ又初ニ
損ヲ爲シタルト同ジ原由ニテ齊シク損毛ヲ重ヌルモノナリ余世間
大商ノ轉覆ヲ見ルニ多クハ初ノ損ハ少ナクシテ身代ヲ傾クル程ニ
ハアラザルモ急ニ其損ヲ復セン^{コト} ヲ企テ二度目三度目ノ損ニテ破
滅スルモノナリ故ニ商人ハ一旦ノ利ニ誇ル^{コト} ナク一旦ノ損ニ驚ク
コナカレ唯恐レ慎ムベキハ日々々々輕々ノ損ナリ只希ヒ望ムベキ
ハ連綿不斷輕々ノ利ナリ一旦ノ損ハ連綿輕々ノ利ヲ以テ救フベケ
レ^レ 連綿輕々ノ損ハ一時ノ利ヲ以テ補ヒ難シ

意外ニ利益アリシ時ノ心得

凡ソ人ハ戒慎ヨリ幸福ヲ得油斷ヨリ災害ヲ生ズルモノナレバ善キ
モ惡シキモ常ニ異ル^{コト} アレバ倍々^ス 謹慎ヲ加エテ注意スベキナリタ
トヘバ若シ今吾商賣品輸入ノ欠乏スル歟或ハ入用ノ俄ニ増ス^{コト} ア
リテ利益常度ヲ超ユル^{コト} アル^ル ハ必ズ又從テ輸入度ヲ越ヘ同商賣
齊シク利益ヲ得難キニ至ル此時ニ當リ預メ其覺悟ナキ人ハ產ヲ破
ル^{コト} アリ

明治二己巳年正月

此冊子ヲ上木スルニ臨ミ童蒙教草ノ一章ヲ抄寫シ板主ニ請フテ
玆ニ追加ス

「フランキリン」ノ遺文ニ云ク富ヲ得ル道ノ易ク平ナルハ市ニ行ク
道ノ如シ唯ニ言ヲ以テ之ヲ盡セリ働ト儉約トナリ時ヲ費ス勿レ金
ヲ費ス勿レ此二ツノ者ヲ巧ニ用ベシ働ト儉約トヲ棄レバ成ルベキ
コナシ此二ツノ者ヲ守レバ成ラザルコナシ少年ノ男子既ニ働キテ
且儉約ナラバ此ノ外ニ富ヲ助成スモノハ綿密ト正直ノ二箇條ナリ
勉強ハ恰モ幸福ヲ生ム母ノ如シ天ハ萬物ヲ人ニ與ヘズシテ働キニ
與フル者ナリ今日ト云フ其今日ノ内ニ働ク可シ明日ノ故障ハ測ル
ベカラズ汝モシ人ノ家來トナリテ其主人ヨリナマケ者トテ叱ラレ
ナバコレニ赤面セザルヤサレバ今汝ハ人ノ家來ニアラズシテ自身

ノ主人ナリ自カラ其懈ルヲ咎テ自カラコレニ赤面セザル可カラズ
明治六癸酉年十月

第一則

入社元金ハ百圓ヲ一口ト定メ一口或ハ數口ヲ一人ニテ出スコト隨意
ナリ○元金社中出ス所ノ元金總高ハ働社中出ス所ノ元金總高二比
較シテ定限ヲ定ムルコト左ノ如シ

働社中
出金 五千 一万 二万 三万 四万 五万 六万
元金社
中出金 五千 一万五千 四万 七万五千 十二万 十七万五千
二十四万

年々諸種積金ノ高ヲ増シ危害ヲ減ズルガ故ニ二年ヲ追テ兩社元金ノ
比較ニ差等アルナリ

元金社中ノ出金ハ右ノ割合ヲ超ユベカラズト雖モ之ヲ減ズルハ妨
ナシ又此ノ比ノ例ニ充タズト雖モ商業ノ景況ニ從テ元金ノ多キヲ
好マザルモハ新入社ヲ辭スルハ働社中ノ隨意タルベシ

第二則 定約利益配分利益ノ事

會社ニテ一十年間ニ得ル所ノ利益ヲ以テ第一ニ總元金高一割五分
ニ當ルノ利ヲ元金ニ配當シ之ヲ元金定約利益ト名ク第二ニ同ジ金

高ヲ以テ働社中總人部ニ配當シ之ヲ働社中定約利益ト名ク其余ヲ
配分利益ト名ケ之ヲ年々兩社中ニ配分スルコト第五則ノ如シ○右ノ
元金定約利益ハ年々之ヲ元金高二加ヘテ全五十年ニシテ元金倍高
トナシ出金主ニ返スベシ

右ノ如ク五十年ヲ一期ト定メ第一期五十年間^{巳午未申酉戌亥}ニ預ルモノハ
第二期五十年間^{寅卯辰巳午未申酉戌亥}ニ返シ一期毎ニ舊ヲ改メテ新トナス其例左
ノ如シ

^{巳午未申酉戌亥}三月朔日入社スル人エ
^{戌亥子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥}三月倍高トナシ返ス

元金社中五十年ニ至リテ請取コト好マザル人ハ舊證券ヲ返シ倍高
ノ新證券ヲ得テ新ニ入社スルコト隨意タリ

右ノ如ク年々舊一十年分ヲ返シ新一十年分ヲ預ルモハ會社ノ元金
年々平均ヲ得テ一時ニ大ナル増減ヲ生ズルコトナシ

五十年間百圓ヅ、出セル元金社中ハ五十年目ヨリ二百圓ヅ、ヲ得
ルナリ其百圓ヲ取り残り百圓ヲ次第二翌年ノ入社金トナスモハ永
久年々百圓ヅ、ヲ得ベシ○年々百圓ヅ、出セル元金社中五十年ニ
シテ定約利益ヲ合セタル高左ノ如シ

二百圓^{五ヶ年}百七十三圓^{四ヶ年}七十五圓^{三ヶ年}百五十圓^{二ヶ年}百三十二圓^{一ヶ年}
二十五圓^{前百圓}百十五圓^{當春ノメ}百七十七圓^{前百圓}五十圓

元金社中若シ入社初年ヨリ年々百圓ヅ、ヲ得ント欲セバ初メニ六
百七十二圓五十錢ヲ出スモハ其年ヨリ年々二百圓ヲ得ベシ其百圓

ヲ取り残り百圓ヲ次第二翌年ノ入社金トナスルハ永久年々百圓宛
ヲ得ルヲ年々百圓宛五十年間出セル人ニ同ジ

第三則 元金社中中途脱社ノ事

元金ハ五十年ニシテ倍高トナシ返スト定ムレバ中途ニシテ脱社
スルハ隨意ナレモ得ル所ノ利益ヲ減ズルヲ左ノ如シ

元金高平均年一割ノ利ヲ添へ取り去ルベシ已ニ年々ノ配分利益ヲ
得タル人ハ之ヲ合シテ年一割ノ利ニ充ツルノミ又利ニ加エタル利
ヲ得ベカラズ○其證券ヲ他人ニ譲ルハ隨意タルベシ若シ然ルハ
譲リ受タル人ノ姓名居所ヲ認メ證券書キ替へ手數料一口ニ附キ五
十錢ヲ添へテ本局ニ投ズベシ

第四則

勤社中出ス所ノ元金ハ元金社中ノ出金ニ比較スルモノナレバ中途
ニシテ隨意ニ脱社スルヲ許サズ但シ元金比較ノ高ニ差支ナク勤社
中ノ衆議ニテモ許ス所ナラバ元金社中ノ例ニ異ナルヲナシ

第五則

會社ノ安全長久ヲ保ツハ全社協合ノ力ニ由ト雖モ商業ノ盛衰危害
ノ増減ハ勤社中ノ勤勉ト怠慢ニ關スルモノナレバ會社ノ災害過失
等ニテ損耗アルハ其責メ勤社中ニアリ故ニ利益少ナキモ定約利
益ヲ頒ツニ足ルハ兩社利益ヲ頒ツヲ甲乙ナシト雖モ利益尙少ナ
キハハ勤社中ノ配分利益ヲ減ズベシ尙利益少ナキハハ細流社ニ積

置ク所ノ備金ヲ以テ之ヲ償ヒ元金社中ノ定約利益ヲ減ズ可ラズ萬
一其損耗多ニシテ細流社積金ヲ出シ盡シテモ尙足ラザルハ勤社
中ノ出金ヲ以テ之ヲ償ヒ元金社中ノ元金ニハ損耗ヲ及ボスベカラ
ズ但シ勤社中ノ元金ヲ減ズルノ場ニ至リテハ元金社中モ其年ノ利
益ヲ得ベカラズ

右ノ如ク勤社中ハ自己ノ出金ヲ以テ元金社中ノ出金ヲ請合フモノ
ナレバ利益多クシテ兩社中ノ定約利益ヲ頒カテ尙餘ル所ノ配分
利益ハ之ヲ三分シテ其一分ヲ元金社中ニ配分シ二分ヲ勤社中總人
部ニ配分スベシ○年々利益ノ増減ニ從テ兩社中利益分配ノ差等ア
ルヲ左ノ如シ

元金	利益	定約利益	配分利益
一万圓	千五百圓	元金社中 勤社中	千五百圓 ナシ
一万圓	二千圓	元金社中 勤社中	千五百圓 ナシ
一万圓	三千圓	元金社中 勤社中	千五百圓 ナシ
一万圓	四千圓	元金社中 勤社中	千五百圓 六百六十六圓餘
兩社中定約利益ヲ年一割五分ト定ムルモノハ現今會社ノ借金貸金 ノ利足ヲ平均シ之ヲ當時世間普通ノ利足ニ比較シテ定ムルモノナ レバ後來世上一般ニ利足ノ降下スルヲアラバ其時勢ニ隨テ減ズル コアルベシ若シ然ルコアルハ前以テ社中ニ報告スベシ其時脱社 ヲ欲スル人ハ中途ト雖モ期ニ充テテ脱社スルノ例ニ同ジ			

第六則 積金ノ事

全社保續金 各店ヨリ月々積金ヲ出シ之ヲ細流社ニ預ケ置キ商業上損毛ノ備金トス

横濱書店 同藥店 同調合局 同唐物店

東京書店 同藥店 同唐物店 同仕立局

大坂店 西京店 各月々六圓 合六十圓

家作積金 地所家作ヨリ取立タル店賃地代等ニテ諸雜費ヲ仕拂ヒタル殘リノ半バヲ勘定場ノ利益ニ加ヘ其半バヲ家作積金トナシテ火災其外朽癭シテ建替ヘヲ要スルキノ備トス

海陸難事備金 東京ヘ送品ハ百分ノ一半西京大坂送り品ハ百分ノ

三ヲ取リテ其内ニテ運送ノ費用ヲ拂ヒ其余ヲ積貯ヘ海陸ノ難事ニ備フ

貸金損耗備金 本局勘定場ニテ貸金ノ利足十分ノ一ヲ月々取除ケ之ヲ積貯ヘ貸金ノ危害ニ備フ又預リ質物ノ流レ荷物ヲ賣拂ヒ元利差引テ利益アレバ亦此積金ニ加フベシ

無名備金 不用道具賣拂代金並ニ人頭稅勸社中奉公人ヨリ出シタル過代金等ヲ積貯ヘ諸種備金ノ不足ヲ補フベシ

以上五種積金ハ他人ヘ請合料^{インシユ}ラ^{ンス}ニ^ニ拂ヒ捨タルト同理ナレバ他ノ費用ニ充ツベカラズ

第七則 社中所有物ノ事

積金其外雜用ニテ買タル道具類等ハ全社利益ノ殘余ニシテ齊シク全社中ノ所有物ナレ^レ兩社中^ニ若シ脫社スル人ハ其所分ヲ有スル得ズ

第八則

社長十口以上入社ノ人ニシテ一ケ年以上社中ニアル人
社長ニ非レバ社長タルヲ得ズ但假社長ハ此限リニ非ズ

全社内外ノ事務ヲ總括シ各店役割ノ當否ヲ察シ全社從前ノ成績後來ノ安危ニ注意シ諸事ヲ指令シ奉公人ヲ進退シ評議入札ノ問題ヲ出ス等專執權アル可シ但シ專任ノ役ヲ置タル各科ニ就テノコハ臨時止ムヲ得ザルノキニ非レバ獨裁スベカラズ即チ商賣上ノコハ各店支配人金銀貸借ノコハ金銀方全社中ニ關係スルコハ取扱人ニ議シテ事ヲ決スベシ

取扱人十口以上入社ノ人ニシテ一ケ年以上社中ニアル人ニ非レバ取扱人タルヲ得ズ

社中ノ便宜ヲ議リ諸評議ノコヲ掌リ總テ社長受持ノ事務ヲ輔佐スベシ又社外或ハ政府ニ關スルコヲ取扱フ役目ナリ

書記方 五口以上入社ノ人タルベシ

本局ノ帳面ヲ總括シ諸店帳合ノ精粗ヲ檢シ全社成績表ヲ造ル等專ラ其任トス

金銀方 五口以上入社ノ人ニ非レバ金銀方タルヲ得ズ

金銀借貸爲替及諸會計ヲ總括シ諸入費ノ辨給ヲ掌トル
各店支配人 二口以上入社ノ人ニ非レバ支配人タルヲ得ズ

其預り店ヲ支配シ商業ヲ取扱フニハ專執ノ權アレハ金銀借貸商賣柄變化住地家作賣買轉宅人員ノ増減其店限り雇入レノ人ハ此例ニ非ズ等ハ獨裁ヲ得ズ

第九則

諸店賣場ニテハ商業ノ元金ヲ預り商賣ヲ營ミ月々元金ノ利足家作代金ノ利足並ニ月々ノ利益ヲ勘定場ニ送り若シ損毛アル月ハ其損分ヲ勘定場ヨリ請取ルベシ故ニ賣場ニテハ始終身代ニ増減ナシトス

第十則

勘定場ニテハ月々各店ヨリ送ル處ノ元金利足ヲ請取り月々其總高ノ内ヨリ入社金高ノ利足ニ當ル高ヲ現益口ニ記シ其余ヲ金利口ニ記スベシ又賣場ニテ損毛アル月ハ其損分ヲ現益口ヨリ出シ勘定期ニ至リテ現益總高ヲ元金總高ト勘社中總人部ニ比較シテ法ノ如ク分配スベシ

第十一則

元金社中ハ其出金ノ多少ニ拘ワラズ働社中ハ其持役ノ輕重ニ拘ワラズ前件諸則中不便利ト思フコアラバ會局ニ云送リテ論駁スルノ權アルベシ又以上定ムル所ト雖モ實際不都合ノ廉アラバ臨時改正スルコモアルベシ

第十二則

働社中並雇人モニ毎夕勤怠録ニ其日ノ勤怠ヲ認ムベシ家ニ在リテ

勤ムルモノハ〔勤〕印ヲ押シ社用ニテ他行スルモノハ〔外〕印ヲ押シ輕疾ニテ社局ニアルモノハ〔病〕印ヲ押シ私用ニテ他出スルモノト私宅ニテ病ヲ養フモノトハ印ヲ省キ其印數ヲ算エテ年中勤メタル總日數トナス

社長並ニ取扱人ハ社局ニ來ラザルモ私宅ニアリテ社用ヲ爲スモハ勤タル日數ニ加フベシ
働社中外出入用ハ其仕拂ヲ記シテ勘定場ニ出シ社中費用ニ屬スルモノハ之ヲ償ヒ其私費ニ屬スベキモノハ之ヲ償フヲ得ズ東京往復ノ汽車ハ下等ヲ例トス只貴客ヲ送迎スルコアルモハ此例ニ非ズ
社中用ユル所ノ帳合ノ仕方ハ社中記帳法ニ記スルヲ以テ茲ニ畧ス

本店勘定場	社長	早矢仕有的
同	取扱人	中村道太
同	書記方	關根柔美
同	金銀方	金澤廉吉
同	監察方	缺員に付當分 早矢仕有的受持
横濱賣場	書店	小柳津要吉
同	藥店	西崎彦七
同	調査所	

同	洋物店
東京賣場	賣店 三次半七
同	洋物店 齋藤 豊八
同	藥店
同	仕立店 高橋 岩路
同	帳面方 伊村 新八
大坂賣場	瀬古 宗七
同	帳面方
西京賣場	書店 柴田 安藏
同	藥店 鬼頭 良助
同	帳面方

丸屋商社死亡請合規則

當社ニ入テ商賣ヲ勉ル者ハ人々ノ働ニ從ヒ配分ノ利益モアルヲナレバ存生ノ間ハ衣食ニ差支ナシト雖_レ或ハ死後ノ覺悟マテハ手ニ及ハサル人モアラン依之此度元金五百圓ヲ備ヘ毎年ノ利足ヲ以テ死亡ノ人ニ給スル議ヲ定メ其規則左ノ如シ

第一條

從來積金ノ内人頭税並無名積金ヲ以テ此元金ニ備フベシ但シ現今積高不足ナルガ故ニ保續積金ヨリ金百圓福澤氏ヨリ金百圓ヲ無利足ニテ借入定數ニ充タシメ年々ノ積金並ニ利足ヲ加エテ其高増加スルヲ俟テ其借入金ヲ償却スベシ

第二條

此元金ハ商社公同ノモノナレハ入社金トシテ之ヲ用ヒ毎年其利益ヲ加ヘテ増加スベシ

第三條

社中死亡スル者ヘハ死後即時ニ金五拾圓ヲ與ヘテ病中死後ノ用ニ供ス可シ

第四條

死後ノ用ニ供ヘテ餘アラバ當人ノ遺言ニ從ヒテコレヲ處置スル歟

又ハ遺言ナクハ最モ近キ親族ヘ渡ス可シ

第五條

目今此請合ノ高ヲ五十圓ト定メタレハ此後死亡ノ人少ナクシテ元金ハ次第二利倍増加スル時ハ再議シテ此高ヲ増ス可シ

第六條

脫社シテ他ノ事ヲ爲ス者ヘハ請合ノ高ヲ與フルコナシ但年老シテ隱居スルカ又ハ現ニ社ノ事ヲ辭スト雖モ他ノ商業ニ就カスシテ隨意ニ社ノ議ニ關スル者ハコノ請合ノコニ付キ社中ト視做シテ定リノ高ヲ與フ可シ

第七條

此請合金ヲ受ル者ハ社中一同ナレハ試中並ニ臨時雇ノ人ハコレヲ除ク（試濟ノ後一ケ年ヲ經テ評議ノ上第一類ニ入ルハ次條ノ如シ）但シ入社退社其外ノ事故ニ由リコレヲ受ク可キ人ノ姓名ハ卷末ニ記シ置キ時々増減アル可シ

第八條

吾社中ニ來ルモノ商業稽古人（中年或ハ小僧ノ類）ハ試濟ノ上全一ケ年ヲ經テ始メテ死後請合金第一類ノ連名ニ入リ（金二十圓ヲ與フ）第一類全一ケ年ヲ經テ第二類ニ入リ（金二十圓ヲ與フ）第二類全一ケ年ヲ經テ第三類ニ入リ働社中ト均シク金五十圓ヲ與フ可シ

第九條

臨時雇ノ人ハ之ヲ除クノ法ナレハ試濟ノ上全一ケ年ヲ經テ社中ノ

入札ニ由テ此連名ニ入ル時ハ上件ノ法ノ如シ

第十條

働社中ノ評議ニ由テ新ニ働社中ニ加ハル人ハ入局後ノ日數ニ均ハラス働分合ノ多少ヲ問ハズ第三類ノ連名ニ加フベシ（金五十圓ヲ與フ）

第十一條

賄所奉公人並ニ荷造方等ハ入局ヨリ全三ケ年ヲ經テ始テ第一類連名ニ入ルヲ得ベシ但シ社中評議ノ上ニテ業務方ノ人員ニ加ハル時ハ其商業ニ入ルノ年ヲ以テ第一類連名ニ加ヘ次年ヨリ之ヲ倍スコ一般ノ例ノ如シ

〔注〕

丸屋商社之記 四六判 本文十二丁

本書は、明治二年正月の「丸屋商社之記」、明治六年の追記及び「丸屋商社々則」十二則、「丸屋諸店擔當人員表」を合せて明治六年十月に上梓された（現存の印刷本としては明治六年刊本が最も古い）。ここではこの明治六年刊本文と、明治八年刊本に新たに所載された「丸屋商社死亡請合規則」十一條をも併載した。

この明治六年刊本の他に印刷された「丸屋商社之記」には次のものがある。

(4) 明治八年刊本 四六判 本文十二丁、後に「丸屋商社死亡請合規則」洋紙十五頁

内容は、明治二年正月の「丸屋商社之記」、明治六年十月の追記及び「丸屋商社々則」十二則、「丸屋商社死亡請合規則」十一條（明治七年五月制定）、「丸屋商社人名録」、「丸屋諸店擔當人員

表」。

(四) 明治十年刊本（甲本） 半紙判 表紙共本文十八丁

内容は、明治二年正月の「丸屋商社之記」、明治六年の追記、明治十年二月改正の「丸屋商社々則」十四ヶ條、「丸屋諸店擔當人員表」、「死亡積金規則」十ヶ條、明治十年二月一日の「傷社中議定」七ヶ條。

(イ) 明治十年刊本（乙本） 半紙判 表紙共二十三丁

内容は(四)の明治十年刊本（甲本）の後に、明治十年十一月十日入社に至る迄の社員人名録を所載。

(ロ) 明治四十四年刊本 半紙判 表紙共本文十三丁

内容は、明治八年刊本と同一。但し「丸屋商社人名録」「丸屋諸店擔當人員表」は除く。

尚、岩波書店発行「福澤諭吉全集」第二十巻には「丸屋商社之記」が取められているが、これに関しては本文上巻四九頁参照。

責任
有限丸善商社定款 明治十三年二月二十五日實施

第一條 商社名号ノ事

當商社ノ各号ハ責任有限丸善商社ト稱スヘシ

第二條 本支店設置ノ事

當商社ノ本店ハ東京日本橋區通三丁目十四番地ニ設置シ支店ハ東京本町貳丁目拾五番地銀座貳丁目六番地尾張町貳丁目四番地横濱辨天通貳丁目廿八番地大坂心齋橋筋北久寶寺町四丁目十四番地同道修町貳丁目三十四番地名古屋本町貳丁目六十八番地ニ設置スヘシ

但シ營業上ノ都合ニ由リ右本支店ノ位置ヲ變更シ又ハ之ヲ増減スルコトアルヘシ

第三條 資本金ノ事

當商社ノ資本金ハ拾五萬圓ト定メ之ヲ千五百株ニ分割シ一株ノ高ヲ一百圓ト爲スヘシ

但シ一人ニテ一株以上數株ヲ所有スルコト隨意ナリト雖モ一人ニシテ當商社ノ資本高ノ三分一以上ヲ所有スルヲ得ス

第四條

營業上ノ實況ニ由リ株主等ハ一同ノ協議ヲ經テ其所持セル株數ノ

割合ニ準シテ前條資本金高ヲ増減スルヲ得ヘシ

但シ増加ノ節ハ新タニ株主ヲ募ルコアルヘシ

第五條 責任ノ事

當商社ノ株主ハ其責任ヲ有限責任ト定ム故ニ若シ當商社ニ於テ非常ノ損害ヲ受ケタル時ハ株金及積金ノアル限りハ其負債ヲ償辨スヘシ

第六條

何人タリトモ〔外國人ヲ除クノ外〕當商社ノ規則ヲ遵守シテ其株式ヲ引受ケ當商社ノ株主牒ニ姓名ヲ登錄シタル者ハ總テ當商社ノ株主タルヘシ

第七條 株式券狀ノ事

株主ハ其引受ケタル株式一箇ニ付株式券狀一枚宛ヲ受領スルモノトス但シ其雛形ハ左ノ如シ

第八條 株式賣買ノ事

當商社ノ株主其所持ノ株式ヲ賣却シ又ハ讓與セント欲スルハ双方連印ノ賣買証書ヲ本社ニ差出シ其檢閲ヲ經株券ノ裏面ニ社長支配人ノ記名調印ヲ受ケタル上之ヲ授受スルヲ得ヘシ此手續ヲ經サル間ハ現ニ株主牒ノ記名人ヲ其所持主ト見做スヘシ

但シ其証書ノ書式ハ左ノ如シ

責任有限丸善商社株式券狀

殿儀

我丸善商社ノ定款ヲ確守シ明治 年 月 日

ヨリ本社株金ノ内壹百圓即チ一株ノ所持主タルコヲ

証スル爲メ此株式券狀ヲ交付致候也

此株式券狀ヲ賣却シ又ハ讓與セント欲セハ本社ヘ持
參スヘシ本社ニ於テ至當ノ檢査ヲ遂ケ此券狀ノ裏面
ヘ社長支配人記名調印ノ上之ヲ差戻スヘシ

丸善商社々長

年 月 日 何 某 印

同 友 配 人

何 某 印

株式賣買証書

責任有限丸善商社株式ノ内第何番〔或ハ第何番ヨリ第何番マテ何箇〕何某所持ノ分代金何圓ニテ今般何某へ賣渡シ候處實正也然ル上ハ向後何某ハ何某所持中ト同様當商社ノ規則ヲ遵守可致候爲後証仍テ如件

年 月 日

住所

買受人 何 某 印

住所

証人 何 某 印

住所

賣渡人 何 某 印

住所

証人 何 某 印

責任有限丸善商社々長何某殿

但シ右手數料トシテ株券一箇ニ付金廿錢ヲ賣渡人ヨリ本社ニ
拂フヘシ

第九條

毎年一月十五日ノ定式總會前三十日間ハ株式ノ賣買ヲ停止シ株主
牒ノ記入ヲ爲サバルヘシ

第十條 株式券狀書改ノ事

當商社ノ株式券狀ヲ毀損シ汚壞シタル等ノコアラハ其事由ヲ認メ
タル書面ヲ出シ新券狀ヲ求ムヘシ又之ヲ焼亡シ紛失シタル等ノコ
アルハ其書面ニ二人以上ノ保証人ヲ連署セシムヘシ

但シ右手數料トシテ金三十錢ヲ拂フヘシ

第十一條 營業年限ノ事

當商社ノ營業年限ハ此定款ヲ確定シ官認ヲ經タル時ヨリ向フ滿十
ヶ年間トス滿期ニ至リ株主衆議ノ上同意ノ多數ニ由リテハ尙ホ之
ヲ繼續スルコヲ得ヘシ

但シ營業年限中ト雖モ株主同意ノ多數ニ由リ官廳ノ認可ヲ得
ルニ於テハ平穩ニ解社スルコヲ得ヘシ

第十二條 總會ノ事

株主總會ハ毎年一月十五日取締役定ムル所ノ場所ニ於テ之ヲ舉行
スヘシ

第十三條

右總會ヲ定式總會ト稱シ其他ノ總會ハ總テ臨時總會ト稱スヘシ

第十四條

取締役ハ何時ニテモ適當ナリト思考スルニ於テハ臨時總會ヲ招集
スルヲ得ヘシ又人員十二名ニ下ラスシテ其所持ノ株數合セテ當商
社總株金高ノ三分ノ一二下ラサル株主ヨリ臨時總會ノ招集方ヲ請
求シタルハ十五日以内ニ之ヲ招集スヘシ但シ右株主ノ請求書ニ
ハ其總會ヲ要スル事件ノ要領ヲ記載スヘシ

第十五條

當商社ノ總會ハ株主ノ總員三分ノ二以上出席スルニアラサレハ開
會スヘカラス但シ第三十五條利益分配ノ事ヲ議スルニハ出席ノ人

員三分ノ二以下タリトモ當日ノ出席數ニ由テ之ヲ議定スヘシ

第十六條

定式總會ノ議長ハ社長之レニ任スヘシ臨時總會ノ議長ハ或ハ社長ヲ以テ之レニ任シ或ハ株主中ヨリ之ヲ選舉スヘシ

第十七條

總會ニ於テ議決シタル事件ハ之ヲ總會決議錄ニ登記シ議長之ニ記名調印スヘシ

第十八條

定式及ヒ臨時總會ノ議事ハ發言投票ノ多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ若シ其數相半ハスルキハ議長自ラ其可否ノ數ニ入ルヘシ

第十九條 株主ノ發言投票及代理人ノ事

株主發言投票ノ權利ハ其所持ノ株數十箇マテハ一株毎ニ一箇ツ、ト定メ十一株以上百株迄ハ五株毎ニ一箇ツ、ヲ増シ百一株以上ハ十株毎ニ一箇ツ、ヲ増シ三百株ニ至レハ其以上ニ之ヲ増スヲナカルヘシ

第二十條

株主ハ其代人ヲシテ總會ニ於テ發言投票ヲ爲サシムルコトヲ得ヘシト雖モ其代人ハ必ス當商社ノ株主タル者ニ限ルヘシ

第廿一條

總會ニ於テ代人タル者ハ一人ニテ自餘ノ三人以上ノ代理ヲ爲スヲ

得ス且ツ當商社ノ役員ハ代人タルヲ得ス

第廿二條 取締役等ノ資格及選舉ノ事

當商社ノ取締役ハ十株以上ヲ所持スル株主中ヨリ六人ヲ選舉シ而シテ例年ノ定式總會ニ於テ其内三人ヲ改撰交代又ハ重任セシムヘシ

第廿三條

取締役ノ協議ヲ以テ其中ヨリ社長一人検査役一人支配人一人ヲ選舉スヘシ

第廿四條

取締役ノ在職年限ハ二ケ年トス

但シ在職セシムヘカラサルノ事故アルキハ此限ニアラス

第廿五條

社長取締役検査役支配人ハ其定格ノ株式券狀ヲ當商社ニ預テ其代リトシテ禁授受賣買ノ五字ヲ附シタル預リ証書ヲ受取り置キ在職中ハ其券狀ヲ引出スコトヲ得ス

第廿六條

社長ハ當商社定款ノ旨ヲ遵守シ當商社ノ總体ニ注意シ内外ノ事務ヲ總括シ副支配人以下ノ諸役員ヲ任免シ其職務ヲ分課シ又取締役一同協議ノ上業務上ニ緊要ナル當商社申合規則及其他雜則ヲ制定施行スルノ權アルヘシ

第廿七條

検査役ハ毎ニ株主一同ノ委員タル心得ヲ以テ當商社ノ諸計算ノ正否ヲ審査シ帳簿其他ノ諸書類ヲ點檢シ以テ其計算ノ正確ナルヲ保證スルノ責ニ任スルモノトス

第廿八條

支配人ハ専ラ商賣上ノ萬機ニ注意シ各店副支配人ヨリノ評議ヲ受ケ日常ノ細事ハ之ヲ裁決シ臨時重大ノ事件ハ社長ニ協議シテ之ヲ判定シ又社外或ハ政府ニ關スル事件ヲ取扱フモノトス

第廿九條

支配人以下ノ役員ハ總テ取締役ノ協議ヲ以テ之ヲ撰定スヘシ

第三十條 商社役員ノ事

當商社ノ役員ハ支配人以上ヲ重役ト稱シ以下ヲ平役ト稱スヘシ

第三十一條

當商社ノ役員ト稱スルモノハ左ノ如シ

取締役 六人

内

社長 一人

検査役 一人

支配人 一人

以上重役

副支配人 八人

書記方 三人

統計方 四人

金銀方 二人

雜務方 一人

普請方 一人

外國往復方 二人

以上平役

第三十二條 營業科目ノ事

當商社ハ書籍藥品舶來雜貨ノ三科ヲ本業トシ裁縫及家具製造ヲ餘科トスヘシ

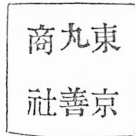
第三十三條

前條ノ如ク定ムルト雖モ時勢ノ變遷商況ノ推移ニ由リ營業科目ノ中甲科ノ資力ヲ削リテ乙科ニ加ヘ又ハ餘科ヲ廢存スル等ノ斟酌ハ之ヲ取締役ノ協議ノ權内ニ任スヘシ去レモ新タニ一事業ヲ興シ又ハ本業中ノ科目ヲ廢スル等ノ變革ハ必ス株主一同ノ協議ヲ要スヘシ

第三十四條 社印ノ事

當商社ニ於テ用フル所ノ印章ハ左ノ如シ

社 印



押 切 印



へシ

第三十七條

萬一當商社ニ非常ノ損失アリテ資本金高虧缺スルハ取締役ヨリ其ノ事情ト計算トヲ總株主ニ報告シ其後ニ生シタル純益金ハ其資本金高ノ虧缺ヲ補ヒ得ル迄ハ年々ノ配當ヲ差止ムヘシ

第三十八條

當商社ノ總勘定ハ毎年十二月廿一日ヲ以テ其正算ヲナシ總体ノ殖益金ヨリ給料利息其他一切ノ諸經費ヲ引去リ其利益金ヲ現ハシ一月十五日ノ定式總會ニ於テ明瞭ニ之ヲ報告スヘシ而メ其配當方ノ割合ハ左ノ定限ニ準據スヘシ

純益高百分ノ十

積立金

是ハ諸公債証書地所其他確實ナル物品ニ換ヘテ其殖益ヲ謀リ

本社保續ノ準備ニ充ツヘシ

純益高百分ノ五

別段積金

是ハ臨時損害ノ準備ニ充ツヘシ

純益高百分ノ五

諸役員賞與配當

純益高百分ノ八十

總株金高ヘ配當

第三十六條

若シ格外ノ利益アルカ或ハ格外ノ損失アル等ニテ前條配當ノ割合ヲ非常ニ増減スルヲ要スルハ株主一同ノ協議ヲ以テ之ヲ決定ス

本社ノ役員等本社ノ成規ニ違背シ依テ損失ヲ生シタルハ其役員等ヨリ之ヲ償辨セシメ又ハ過意金ヲ徴スヘシ或ハ役員又ハ株主ノ内一人ノ所業ニ依テ損失ヲ生ジタルハ其者ヨリ償金又ハ過意金ヲ徴シ自餘ノ株主ヘハ損失ヲ蒙ラシメサルヘシ但シ其償金ハ本人所持ノ株金等ヲ沒收シ傭人ハ身元引受人ヨリ償辨セシメ尙ホ足ラサルハ身代限り迄取立ヘシ

第三十九條

前條ノ如ク株金等ヲ沒收シ身元引受人ヨリ償辨セシメ身代限り迄モ取立タル上ニテ尙ホ其損失高ヲ償ヒ得サル場合ニ於テハ取締役協議ノ上當社利益金ノ内ヨリ之ヲ補ヒ株主一同ヘ報告スヘシ

第四十條 諸報告ノ事

當商社ノ取締役ハ總勘定ノ後ニ於テ損益精算書ヲ製シ定式總會ニ於テ之ヲ株主ノ閱覽ニ供シ且ツ同時ニ於テ當商社現在ノ資産ト負債トノ計算畧表ヲ製シ印刷シテ之ヲ株主總員ニ配付スヘシ

第四十一條

當商社ノ株主タル者ハ何時ニテモ社長又ハ支配人ニ就キ本社營業上ノ實況ヲ質問シ且ツ諸帳簿ヲ檢閲スルヲ得ベシ

第四十二條

當商社ノ株主タル者ハ當商社ノ印刷シタル商社諸規則報告等ノ書類ハ各一部ツ、ヲ要求スルヲ得ヘシ

第四十三條

此定款ノ條件ハ株主總會ノ格段決議ニ依テ之ヲ改正シ又ハ増減スルヲ得ヘシ

右之條々ハ株主一同ノ協議ヲ以テ取極メ候證據トシテ各自姓名ヲ記シ調印致候也

〔注〕 責任有限丸善商社定款 明治十三年二月二十五日實施 半紙判

本文十丁

明治十二年十二月定款草案を作成、株主の協議に付し、翌十三年二月二十五日を以て之を實施することになり、營業年限も同日より起算すべきことを記載。この定款制定により丸屋商社は從來の組合組織を改め、純然たる責任有限の株式会社として名称を丸善商社と改称、本店を東京市日本橋區通三丁目十四番地と定め、資本金を十五万円（改組と同時に金額払込済）と規定、取締役以下役員を設け、營業科目中書籍、藥品、舶米雜貨の三種を本業とし、裁縫、家具製造業を余業とした。